



## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスはなぜ沈黙のうちに死ぬのか

主の御受難を、ヨハネ福音書の朗読で迎えました。今年の典礼暦はB年ですから、黙想するためには受難の主日に朗読されたマルコ福音書第15章を用いたいと思います。

受難の主日で指摘したように、マルコ福音書の受難の朗読で、イエスは最初と最後の言葉だけしか記録されていません。沈黙の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。次第にすべてを奪われていく中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。

葦の棒で頭を叩かれ、ひどい言葉で侮辱され、衣服を剥がされ、罪状書きが貼られた十字架にはりつけにされ、ののしられる。それらの姿の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。どうすればあれほどの惨めさの中に、神の愛を見ることができるのでしょうか。それはただ一つ、「沈黙によってのみ」見ることができるのだと思います。

昨年末、大分教区の教区長浜口末男司教様が亡くなりました。大神学生時代に上五島の大曾教会に浜口神父様がおられてたいへんお世話になったので、葬儀ミサに出席したかったのですが新型コロナウイルスの影響で叶いませんでした。たいへん慕われていた司教様でしたのでだれもが出席したかったはずです。

葬儀ミサに出席できなかつたので、平戸地区の司祭たちは同じ日、同じ時間に追悼ミサをささげました。そのミサの中で平戸地区長の山村神父様が次のような思い出を語ってくれました。「私山村神父がいちど命の危険にあった時、たいへん怖い思いをしたとその時のことを当時の浜口神父様に話したことがありました。すると浜口神父様は表情を変えずにこう諭してくださいました。」

「『山村神父様の覚悟はその程度か？司祭はすべて、司祭になった瞬間から、イエスのためにいつ命をささげてもよい。この覚悟ができていないといけない。』私山村神父は、浜口神父様の言葉を聞いて、深く心を打たれたのです。晩年浜口司教様のご自身の病気を誰にも一切知らせず、沈黙の中で最後まで命を燃やし尽くしたことも、かつての体験と重ねて納得できたのです」と話してくれました。浜口司教様は、教区民すべてのために、ご自身による沈黙のおささげで遺言を託されたのです。

このあと行われる十字架の礼拝で、布を剥いでいくしぐさがあります。すべてが失われる姿を現しています。今日、聖櫃には御聖体が収められていません。この祈りの家を聖なるものとしている御聖体も取り去られているのです。あらゆるものが取り去られて、何も残っていないのでしょうか。

そうではありません。私たちを救おうとされるイエスの愛は、決して奪われないのです。すべてを奪われているのは、沈黙によってイエスの愛を見るためです。この静けさの中に私たちもしばし身を置いて、沈黙の中で神の愛を確かめることにしましょう。